

第2分科会記録

増加し続ける特別支援学校(知的障害)の児童生徒—増加の実態とその教育的対応—

研究報告 井上 昌士 国立特別支援教育総合研究所
シンポジスト 湯汲 英史 早稲田大学 客員教授／(社)日本発達障害福祉連盟常任理事
竹林地 毅 広島県教育委員会事務局教育部特別支援教育課 課長
尾崎 祐三 東京都立南大沢学園 校長／全国特別支援学校長会 会長
司会 猪子秀太郎 国立特別支援教育総合研究所

第2分科会では、はじめに研究代表の井上昌士より本分科会の企画趣旨の説明があったのち、研究報告、シンポジストから提案発表があった。

<研究報告及び提案発表>

研究報告では、本研究所の井上昌士より「知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究」と題して、H15～20年度の学校基本調査データ、H21年度全知長研究大会における情報交換資料の学校別データ等による知的障害特別支援学校の在籍者数増加の実態、増加に伴う困難、今後の対策の展望について報告した。

提案発表①では、竹林地 毅氏より「増加に対応した教育指導の現状と課題」と題して、広島県の特別支援学校等の状況等について報告があり、この研究の調査結果に基づき、増加に対応した教育指導の課題について提案がなされた。課題として(1)教育課程の編成と実施、(2)教員の専門性の維持・向上、(3)学校マネジメントがあげられた。

提案発表②では、湯汲英史氏より「発達障害(知的障害を含む)の増加原因の究明と対応策の策定」と題して、(社)日本発達障害福祉連盟で行った調査研究について報告がなされた。知的障害を伴わない発達障害が増えているが、その要因については、診断基準の変化や障害感の変化、教育制度の変化等が影響していると考えられる。一方で医師の診断基準も変化する中で要因が特定できない状況がある。

提案発表③では、尾崎祐三氏より「知的障害特別支援学校における児童生徒数の急増と求められる対応」と題して増加の原因と必要な対策について提案がなされた。増加の要因としては、①「通級による指導」の制度化による比較的軽い障害の児童生徒の希望者の増加、②「個別的教育支援計画」の策定による特別支援学校における個のニーズに応じた教育の充実、③特別支援教育への移行による対象者の広がりが考えられ、必要な対策として、①普通教室の確保、②小学校・中学校への支援の充実や特別支援教室設置の検討の必要性、③高等学校における特別支援教育への支援の充実があげられた。

(以上、要項 P27～P35)

<提案発表者への質問>

司会 : 保護者の受診動機の高まりについて以前の報告があったが、詳しく知りたい。

湯汲氏 : 検診制度が整い、受診動機も高まっている。3歳児はほぼ全員受診しているが、診断の網の目を小さくすると半数以上のケースに診断名が付くこともある。一方でこんなに小さいうちから、発達障害の診断名をつけていいのかという思いもある。保護者の中にははじめ予防で特別支援を希望しているケースもある。昔はなかった、

いじめ要因のケースが増えている。

司会：特別支援学校の適正規模、設置基準についてどう考えればよいか。

尾崎氏：特別支援学校にも適正規模や設置基準があってほしいが、要望すれば、結果的に子どもが放り出されるのが目に見える。今の状況においては、文科省や自治体の穏やかな対応が必要で、できるだけ子どもが安心して通える状況を作してほしい。

司会：児童生徒が増えれば教員の数も増える。学校のマネジメントも難しくなるのでは。

尾崎氏：現在、二つの学校で120名の教員を抱えているが、規模が大きいため行き届かないというものではない。組織として連携がうまく整っていればうまくいく。

井上：教員数が150人でほとんど顔をあわせないという学校もある。学部単位の運営になり、職員会議の意味も変わってきている。一方で、専門性の研修が大切になり、中間管理をする主幹教諭の役割が大きくなってきている。

<話題提供>

研究代表の井上昌士より「知的障害特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究」（平成22～23年度）について話題提供した。

<提案者への質問>

司会：軽度の定義をどう考えたらよいか。

湯汲氏：手帳の取得についてみると、地域や県によってかなり捉え方が違う。IQで見えるのか、社会性で見えるのか、知的障害の判定の在り方を見直す時期に来ている。

司会：就労100%をめざす南大沢学園では、どのようなことを大切にしているのか。

尾崎氏：全員が知的障害であるが手帳の取得は7～8割である。取得していない人は自分で納得して取るようにしている。指導では、自分は何者かをキャリア教育を通して学んでいる。自己肯定感を持たせることや卒業後の生活に生かせる内容（合唱祭、体育祭、部活…余暇につながる）、仕事に生かせる内容に力を入れている。

<参加者との質疑応答>

参加者：学習塾で、IQが130、社会的な支援が必要な生徒の進路指導で悩んでいる。

尾崎氏：特別支援学校には入れないので、高等学校に入って、専門機関に相談するとよい。就労については就労センターに相談するとよい。

湯汲氏：頭がよい子どもであっても、人から教われないとその後が伸びない。感情のコントロールも含め、人から学ぶ力を育むことが大切である。

参加者：親から離れている子どもは、自己肯定感が低い。どうかかわったらよいか。

湯汲氏：児童養護施設の子どもたちは、自己安定感が不足し学習が続かない。結果ではなくプロセスを大切に、長い目で自己安定感を育てることが大切である。